

資 料

J. E. W. ウォーリンによる心理教育クリニックの創設と個別的ニーズへの対応
— 20世紀初頭セントルイス市公立学校を中心に—

吉井 涼

20世紀初頭アメリカ合衆国セントルイス市において、学業不振児や精神薄弱児への対応を試みたJ. E. W. ウォーリンと心理教育クリニックに焦点を当て、彼の実践とその実践を支えた思想を検討した。当時、セントルイス市の通常学級や特殊学校では学業不振や精神薄弱を含む多様な状態をもつ子どもが混在し、彼らの適切な診断・分類と彼らのニーズに合う教育の場の整備が課題であった。ウォーリンは、民主主義理念に基づき、知能検査の限定的活用、検査手続きにおける専門家主導、州法による特殊学級設置義務化を通じ、公立学校の多様な要素を整理し、個々のニーズを満たす区別化された教育を提供する基盤を形成した。この過程において、彼は、効率と合理性を目ざす革新主義期に規定されつつも、子どものもつニーズや教育を受ける権利を重視した。しかし州法の制定は、各学区の特殊学級設置には必ずしも結びつかなかったが、その背景には、有能な検査者不足等があった。

キー・ワード：精神薄弱 学業不振 心理学 知能検査 特殊学級

I. はじめに

20世紀初頭のアメリカ合衆国（以下、アメリカ）では、効率と秩序を目ざす革新主義教育を背景とし、教育実践や教育行政をめぐる諸問題の解決にあたり、科学的アプローチの優越性が確立された（森田 [1994] 108）。科学的な学問となることを目指していた当時の心理学者にとって、教育は有望な社会的実践の場であった（森田 [1994] 107）。当時、公立学校においては、産業構造の変化や就学義務の強化等による就学者数の急増と、それに伴う学業・行動、あるいは健康状態に問題を示す多数で多様な子どもへの対応に迫られていた（Hoffman, 1975）。心理学者は、予防と統制、人間工学（human-engineering）、社会効率を標語とし（Minton [1987] 106）、社会

に対しその学問の実際的な有用性を示そうとした（チャップマン [1995] 46; 森田 [1994] 106-108）。

とりわけ、心理学者による知能検査の開発は、科学的な手段をもたらした。知能検査は、第一次世界大戦を契機に、公立学校に大規模に導入され（チャップマン [1995] 47, 52; ラヴィッチ [2008] 139）、主に精神薄弱児の発見と能力別の学習集団の編成の基礎として利用される（宮本, 2005; 中村, 2008）。その一方で、境界線（borderline）、魯鈍（moron）、遅進（slow）、学業不振（backward）などと呼ばれる子どもは、その状態像や要因の多様性と複雑性から、診断・分類が困難であった（Luckey [1967] 172）。

J. E. W. ウォーリン（John Edward Wallace Wallin 1876-1969）は、学業に困難を示す子どもに関心を示し、こうした子どもの診断と分類に加え、彼らのニーズに適した教育の場の構築を

試みた臨床心理学者である（中村・岡 [2009] 121; Winzer [1993] 357）。彼は、イエール大学（Yale University）から実験心理学的研究で博士の学位を取得した後、1901年から1902年までクラーク大学（Clark University）のG. S. ホール（G. Stanley Hall 1844-1924）のもとで研究補助員として勤務した。その後は、1910年代半ばから1930年代半ばにかけて、各地の大学や公立学校を中心に、子どもの診断と分類のためのクリニックを次々に開設したが、とりわけ1914年のセントルイス市教育委員会に開設された心理教育クリニック（Psycho-Educational Clinic）は、都市教育行政と心理学者の協力の先駆例として評価されている（Chapman [1927] 92）。彼は、同クリニックの所長に任命され、公立学校に在籍する子どもの診断と分類を試みた。さらに彼は、ミズーリ州法における特殊教育関連法案を起草し（Anonymous [1945] 228; Winzer [1993] 329）、同法で、特殊学校・特殊学級の設置、州補助条件、教員資格、入・退級手続き、指導法、学級組織、指導職の設置などを規定し、各障害のニーズに合った教育環境を整備した（中村・岡 [2010] 116）。

このように、ウォーリンは、セントルイス市教育委員会において、子どもの診断方法の構築と教育の場の創設を試み、公立学校を、多様な子どもの雑然とした状態から整理された状態へと変えていったが、その具体的な過程については明らかになっていない。ウォーリンについては、心理学や特殊教育に関する通史のなかで記述は多くみられるものの、いずれも若干の紹介と考察に留まっている（Danforth, 2009; Hermann, 2010; Popplestone & McPherson, 1994; Routh, 2000; Scheerenberger, 1983; Winzer, 1993; Zenderland, 1998）。セントルイス市教育委員会において、心理学者のウォーリンが、公立学校に在籍する学業に困難を示す子どもの問題に対して、いかなる思想をもち、どのような対応を試みたのかを明らかにすることは、公立学校における多様な状態の子どもの整理と細分化の過程に、心理専門家がいかに関与し、いかなる影響をもつ

たのかを究明する上で、重要な検討課題である。

そこで本研究は、セントルイス市におけるウォーリンの実践とその実践を支えた彼の思想を究明することを目的とする。主な対象時期は、彼が同市教育委員会に着任する1914年から、同市を離れる1921年までとし、主な資料は、セントルイス市教育委員会年次報告書とウォーリンの著書・論文とする。

なお、本研究は歴史的研究であり、用語は当時の表現を用いる。

II. 20世紀初頭セントルイス市における精神薄弱児の不適切処遇と心理教育クリニックの開設

1. セントルイス市特殊学校における精神薄弱児と非精神薄弱児の混在

セントルイス市は、ミズーリ州東部に位置し、古くから西部地域の開発に主要な役割を果たしてきた都市である。同市は、人口の急増と産業の発展、そして移民の流入といった大都市にみられる典型を経験した都市であった。セントルイス市の人口は1890年には約45万人、1900年時点で、アメリカで4番目の約57万人であった。同市の経済発展はニューヨーク市（NY州）、シカゴ市（IL州）、フィラデルフィア市（PA州）に次ぐ4番目、外国系人口比率は60%を超えていた（野村 [1995] 25; Troen [1975] 2-3）。

セントルイス市では、人口の急増に伴い、公立学校在籍者も1890年の約6万人から1900年に約8万人へと増加がみられ（48th Annual Report of the Board of Education of the City of St. Louis (AR): Soldan [1903] 36）、他州の主要都市と同様に、公立学校における学業や行動に逸脱を示す子どもの問題が顕在化する（Hoffman, 1975）。1903年の教育長報告では、通常学級内に、遅進児や学業不振児、そして精神薄弱児（defective mentality）が在籍していると報告された（48th AR: Soldan [1903] 144-149）¹⁾。教育委員会は、遅進児・学業不振児と精神薄弱児の明確な区別が困難であることを認識しつつ²⁾、両者に対しては、異なる対応が必要であると指摘していた。

遅進児・学業不振児に対しては、混合学年教室 (ungraded room) での対応を通じて、各々の能力に沿った進歩が期待された (48th AR: Soldan [1903] 144-149)。一方、精神薄弱児に対しては、教育委員会は彼らの教育を公教育の範囲内とし、効率的で適切な教育の提供を義務と捉え、特殊学校の開設を求めた (48th AR: Soldan [1903] 144-149; 53rd AR: Soldan [1908] 333-334)³⁾。

通常学級の留年児や教師の負担の増加によって、公立学校が教育的・経済的に非効率であったことは、セントルイス市教育委員会が、公立学校の秩序を保つための方策のひとつとして、特殊学校を開設したことを意味する。セントルイス市最初の特殊学校は、精神薄弱児へ通常学校では与えられない特別な教育の提供、そして精神薄弱児の分離による正常児や通常学級教員の負担軽減を目的として (53rd AR: Soldan [1908] 332-333; 60th AR: Blewett [1915] 157; Blewett [1909] 360)、1908年⁴⁾に開設された。開設初年度に3校で始まった特殊学校はその後、学校数が徐々に増加し、心理教育クリニック開設以前の1913-14年度には13校となっていた (66th AR: Wallin [1921] 132-133)。

セントルイス市における特殊学校の特徴として、第一に、先行する他都市の特殊学級が、「学業や行動の逸脱児童機関から細分して開設された」(中村 [1992] 92) のに対し、同市では当初から精神薄弱児を対象として想定した点がある。一方、通常学校内の混合学年学級対象とされた学業不振児、学校教育から利益を得られないとみなされた痴愚児 (imbecile) は対象外とされた (53rd AR: Soldan [1908] 332-333; Blewett [1909] 360)⁵⁾。

第二の特徴として、通常学校とは別個の校舎に開設されている点がある。「特殊学級は、公立学校の学年別学級 (grade school classes) 以外に設置された学級であり、別の校地に開設されて『学校』と称する場合」(岡・中村・吉井 [2010] 3) があり、セントルイス市では学校の形態を採用していた⁶⁾。通常学校との別校舎の形態を採用する理由は、分離された環境のほうが、精神

薄弱児は、正常児によって妨げられることなく、より自由で幸福になり、容易に励まされ指導されるからであったが (57th AR: Blewett [1912] 94-95)、通常学級の秩序維持の側面があったことも否定できないであろう。

特殊学校は年々、学校数と在籍者数を増やしていったが、次第に、特殊学校内において、学業不振児から精神薄弱児まで多様な子どもの混在が顕在化し⁷⁾、いわゆるダンピングとみられる現象が生じていた。それは、心理教育クリニック開設直後の校長らの不満からみえる。ある校長によれば、同クリニック開設以前は、問題のある子どもを特殊学校へ送ることが拒否されることはなかった (Wallin [1920a] 107)。このことは特殊学校が、通常学校の秩序安定の場になっていたことを示すものである。こうした校長による無秩序な特殊学校への措置の結果として、教育委員会は、特殊学校対象児の適切な選別という課題に迫られることとなる。

多様な子どもの無秩序な入学に起因するとみられる学校数の不足によって、精神薄弱児の入学が困難になっていることを危惧したセントルイス市教育委員会は、特殊学校の入学対象児の選別を監督する専門家を求めるようになる (59th AR: Blewett [1914] 132; 60th AR: Blewett [1915] 157)。こうして当時の教育長であるB. ブレウエット (Ben Blewett) は、教育委員会の管轄下に心理教育クリニックを開設し、心理学専門家としてウォーリンを招聘する (60th AR: Blewett [1915] 158)。

2. ウォーリンの経歴および心理教育クリニックの目的と対象

ウォーリンは、1901年の博士号取得後、ミシガン大学 (University of Michigan) やクリーブランド師範学校 (Cleveland Normal School) で教鞭をとり、1910年には、H. H. ゴダード (Henry Herbert Goddard 1866-1957) の紹介で、ニュージャージー州スキルマン (Skillman) にあるてんかん者施設 (the New Jersey Village for Epileptics) に勤務する。1912年にウォーリンは、ピッツバーグ大学 (University of Pittsburgh) に移り、同大学

に彼にとって初の心理クリニック (Psychological Clinic)⁸⁾ を開設する。約2年間、同大学に勤務した後、彼は、セントルイス市教育委員会からの招聘を受諾し、セントルイス市の心理教育クリニックの所長になるとともに、特殊学校の指導監督の職を得ることとなる。彼は、こうした遍歴について、臨床経験や教育行政の経験といった新たな経験を求めてのことであったと自伝で回顧している (Wallin [1955] 39, 58)。

なぜウォーリンが招聘されたのかは不明であるが、ピッツバーグ大学における心理クリニックの運営経験をもち、さらに公立学校制度と連携したクリニックの開設を望んでいた彼は、教育委員会の目的に合致する人物であったといえる。彼は、精神薄弱を発見するためには、精神薄弱が診断され登録されるクリニックや判別所 (clearing house) を設立することが必要であり、その最も満足いく形態は、州の教育部、もしくは大都市の学校制度と連携した公的なクリニックであると主張する。こうした主張の背景には、公立学校のみが、社会の変化によって生じる諸問題を解決できるという彼の公教育に対する信頼があった (Wallin [1914] 337; [1915] 116)⁹⁾。

ウォーリンは心理教育クリニックにおいて、通常の教育では対応できない全ての子どもの状態を把握し、彼らのニーズに合った教育の場への措置を目ざしたが、実際にはこれら全ての子どもを検査することはスタッフの不足により不可能であった¹⁰⁾。そのため、心理教育クリニックはその検査対象を精神薄弱児に制限し (63rd AR: Wallin [1918] 170)、特殊学校対象者の選別を第一の目的とした (61st AR: Wallin [1916] 146)。

心理教育クリニック開設以前の特殊学校における多様な子どもの混在を鑑みれば、検査を特殊学校対象者の選別に限定することは自然なことであるが、所長のウォーリンの精神薄弱者に対する考え方からも、当時の公立学校にとって精神薄弱者の分類・対応がいかに大きな課題であったことは見て取れる。彼は、精神薄弱以上に、社会の幸福と人種統合に対し、深刻な脅威

をもたらす集団はいないと指弾しており (Wallin [1915] 115-116)、当時のアメリカにおける典型的な優生論者であった¹¹⁾。精神薄弱脅威論が叫ばれるなか (トレント [1997] 3-88)、学校運営の効率化を図る上で、精神薄弱児対策は看過できない問題であった。

Ⅲ. 心理教育クリニックにおける来談児の状態・ニーズの把握

1. ウォーリンによる個別的検査の重視と診断に対する慎重な態度

ウォーリンは、心理教育クリニックでの診断において、1908年版と1911年版のビネーシモン式知能尺度、スタンフォード・ビネ知能検査を活用していた (Wallin [1917a] 175)。当時、ビネーシモン式知能尺度は、子どもの診断における決定的証拠としての地位にはなかったが、公立学校では最も有用な検査として同尺度が用いられていた (チャップマン [1995] 66-67; Smith [1914] 150)。

一方、ウォーリンは、てんかん者施設やピッツバーグ大学の心理クリニックにおいて、各尺度間での比較研究や (Wallin, 1918; 1919a; 1921a; 1923)、教師による評定、特殊学級卒業後の仕事状況、検査結果の比較研究 (Wallin, 1922b) などを通じて、知能検査の妥当性と正確性について検証してきた。そうした臨床的研究の蓄積により彼は、知能検査のもつ価値を認めつつ、それらは標準化不足であるし、学業不振と精神薄弱を即座に区別できるものではないとした (Wallin [1913] 682; [1922c] 223)。もっとも知能検査の制約自体は、1910年代半ばまでのアメリカでは、心理学者や教育関係者の間で認識されていた (チャップマン [1995] 35-36; 宮本 [2005] 65-66)。

ウォーリンは、知能検査の結果を、他の様々な情報と組み合わせることで、知能検査の結果に制限を加えた、生活歴と心理-生理的評価を結合させる包括的な診断計画を考案する (Doll [1967] 179-180)。すなわち、心理教育クリニックでは、知能検査だけでなく、身体検査、人体

測定、知能・運動・選択・情緒の特異性の調査、言語障害の有無、非行調査、生育歴、家族の調査、教育歴などにに基づき、総合的な診断が試みられた (66th AR: Wallin [1921] 136; Wallin [1922c] 219)¹²⁾。

これらの検査は心理教育クリニック内で個別に実施されたが、当時の教育長は、より即座に、大量に検査するため、公立学校内で検査を実施することを望んだ。ウォーリンは教育長の提案に応じ、1916-17年度に実際に公立学校内での検査を試みるが、その利便さを超えた診断の困難さがあることを指摘し¹³⁾、結局単年度での実施に終わる (63rd AR: Wallin [1918] 162)。

検査の実施方式を巡って、効率性を求める教育委員会とウォーリンとの間で意見の対立がみられる。検査に対する彼の考えの背景には、彼の心理学者としての専門性の重視と、子どもの診断の重要性と危険性に対する認識があった。心理学者の専門性について、ウォーリンは医学と比較して説明している。彼は、優秀な医学検査は脈拍や体温の測定以外にも様々な検査を実施していることを例にあげ、心理学的検査においても同様の手続きを経るべきであると主張する (Wallin [1913] 678)。医学を心理学のロールモデルとする論理は科学的学問を目ざす当時の心理学者において共通してみられた (Brown [1992] 41)。彼は、医学と同等の専門的訓練課程を心理学課程にも求め、アマチュアの知能検査実施者を批判する (Wallin [1913] 680; [1919b] 463)。また、一度決定した診断は、その子どもの生涯を通じてついて回る可能性が高く、また子どものもつニーズに合わない区別化された指導は、通常の指導よりも危険であると指摘した (Wallin [1920a] 105-106)。

2. 検査手続きにおける学校長から心理教育クリニックへの権限の移動

心理教育クリニックへの検査の依頼者は、その多くが公立学校関係者であった。1914-15年度は430人中377人、1915-16年度は434人中297人、1916-1917年度は499人中454人の来談児が公立学校からであった (61st-63rd AR: Wallin,

1916-1918)。しかし、心理教育クリニックが開設された1914年時点では、検査が必要な子どもを心理教育クリニックへ依頼することは、各学校の校長に委ねられていたため、全く依頼のない初等学校が存在した。その割合は、1913-1914年度で31%、1914-1915年度で21.1%、そして1915-1916年度で15.1%であった (66th AR: Wallin [1921] 139)。

ウォーリンは、特殊学校の教員へ聞き取りを実施し、校長が生徒を依頼しない理由を調査した。第一に、精神薄弱児がいないと校長が確信していること¹⁴⁾、第二に、両親との対立を校長が危惧していること、第三に、精神薄弱児の分離により子どもが感じるであろう社会的・教育的劣等感を校長が問題視していることを指摘した (Wallin [1920a] 111-112)。こうした制約から、心理教育クリニック開設直後の3年間は、精神薄弱児の割合が低かった (Table 1)。

全く依頼をしない学校が存在する原因を、ウォーリンは、既存の報告システムに求め、心理学の専門家が主導するシステムへと変える必要性を説く。子どもの精神的・教育的診断は心理学者でさえ当惑するほど曖昧なものであると認識する彼は、校長の主観によって精神薄弱の有無が判断されている現状を危惧した (63rd AR: Wallin [1918] 169; Wallin [1920a] 106)。そこで彼は、検査手続きを改正し、1917-18年度から検査対象の子どもを選択権を校長から心理教育クリニックへと移した。

この改正によって、校長は、学校で最も深刻な学業不振もしくは精神薄弱児の1%の子どもに関する情報を心理教育クリニックに送らなければならないよう規定された。同情報を受け、心理教育クリニックは、特殊学校の対象者となりそうな子どもで、かつ、クリニックで検査する必要のある子どもを選択し、各学校長へ連絡する。続いて、各学校長は、当該生徒に関する質問用紙を埋め、クリニックへ返送し、その後、クリニックが各学校長へ検査日を通知するという手続きとなった (65th AR: Wallin [1920] 76-78)。この改正により、1917-1918年度には、1

Table 1 心理教育クリニックにおける被試験者の知能の程度と質

	1914-1915		1915-1916		1916-1917		1917-1918		1918-1919		1919-1920	
	合計	%	合計	%	合計	%	合計	%	合計	%	合計	%
正常	30	6.9	17	3.9	15	3	5	1.5	5	1.8	14	3.23
遅滞 (retarded)	51	11.8	16	3.6	23	4.6	16	4.9	7	2.5	4	0.92
学業不振	142	33	180	41.4	164	32.8	52	16	51	18.4	84	19.32
境界線	49	11.3	56	12.9	156	31.2	74	22.8	89	32	123	28.29
潜在的精神薄弱	*	*	*	*	*	*	52	16	19	6.8	25	5.75
保留 (reserved)	27	6.2	30	6.9	26	5.2	7	2.1	11	3.9	2	0.46
不確定な精神 (undetermined)	4	0.9	1	0.2	1	0.2	*	*	*	*	*	*
不確定	*	*	*	*	*	*	*	*	1	0.3	1	0.23
魯鈍	64	14.8	80	18.4	60	12	73	22.5	35	12.6	58	13.34
潜在的魯鈍	*	*	*	*	*	*	*	*	34	12.2	58	13.34
魯鈍と潜在的魯鈍	*	*	*	*	*	*	*	*	69	24.8	116	26.45
痴愚	59	13.7	53	12.2	52	10.4	45	13.7	25	9	64	14.72
白痴	4	0.9	1	0.2	2	0.4	1	0.3	0	0	*	*
境界線と潜在的精神薄弱の合計	49	11.3	56	12.9	156	31.2	126	38.7	108	38.9	148	34.04
精神薄弱の合計	127	29.5	134	30.8	114	22.8	119	36.6	94	33.8	180	41.17

出典) 61st-66th AR, 1916-1921

校を除いた全ての初等学校から、特殊学校への検査対象者を確保することができ (65th AR: Wallin [1920] 85)、心理教育クリニックにおいて精神薄弱と診断される子どもの割合が増加したことがTable 1から見て取れる。

この教育委員会の権限の拡大において、校長による心理教育クリニックに対する反発が存在した。このことは、教育委員会からの圧力がない限り、進んで報告をしようとししない校長がいたことから示される (Wallin [1920a] 114)。

3. 特殊学校対象者としての精神薄弱児の選別の実現

心理教育クリニックにおける個別的な検査の実施、そして検査手続きの改正を通じて、心理教育クリニック開設以前の特殊学校在籍者数の肥大化の問題は一定の解決をみたことが、Table 2から見て取れる (63rd AR: Wallin [1918] 178)。

この在籍者数の減少の理由について、ウォーリンは、心理教育クリニックによって実施された、子どもの明確な区別にあると評価している (Wallin [1920a] 109-110)。しかし、心理教育クリニックにおいて、特殊学校への措置を推奨された子どものうち、実際には入学しなかった子どもの割合を見ると、1915-16年度は15%、

1916-17年度は35.6%、1917-18年度は25.2%、1918-19年度は30.6%であり (65th AR: Wallin [1920] 92)、明確な区別が可能になったという彼の評価には疑問が残る。特殊学校への措置を推奨された子ども全てが実際に入学したと仮定すると、特殊学校の在籍生徒数には大きな減少傾向にないといえる。彼自身も、1917-1918年度の年次報告書において、「44人が実際に入学した場合、特殊学校は過密化するだろう」 (65th AR: Wallin [1920] 92) と危惧していた。それゆえ、彼は特殊学校の増設が必要であるという認識も示している (66th AR: Wallin [1921] 138)。とはいえ、ウォーリンによる自己評価だけでなく、特殊学校への措置が推奨された子どもの知能の診断状況に鑑みると、学業不振や遅滞と診断される子どもの数が少なくなっており (Table 3)、特殊学校が精神薄弱児の教育の場として整備されたといえるだろう。

また、特殊学校への措置が推奨されたにもかかわらず実際には入学しない子どもについて、1917-1918年度の44人のうち理由が判明したものは39人であった。その内訳は、18人が学校までの距離、低い精神年齢や生活年齢、病気、就労などによるものであり、21人は親の反対によるものであった (65th AR: Wallin [1920]

Table 2 セントルイス市の特殊学校に関する統計的データ

年	学校数	教員数	総登録者	平均日々 出席者	教員 1 人当たり生徒数		総費用
					平均日々 出席者	平均日々 登録者	
1907-08	3	6	100	84	14	14.5	\$10,312
1908-09	6	12	223	148	12.3	13.4	27,664
1909-10	7	17	303	203	11.9	13.1	31,189
1910-11	9	22	396	264	12	13.1	36,675
1911-12	11	26	467	307	11.8	13	48,099
1912-13	13	29	529	341	12.2	12.8	58,159
1913-14	13	31	600	380	12.2	13.5	61,323
1914-15	12	29	529	326	11.2	12.2	63,521
1915-16	12	29	484	320	11	12.2	58,557
1916-17	12	27	434	308	12.8	14.4	54,381
1917-18	11	25	471	297	11.8	13.8	53,*39
1918-19	11	25	455	296	11.8	13.7	54,482
1919-20	12	25	501	321	12.8	15.8	60,333

出典) 66th AR: Wallin [1921] 133**Table 3** 特殊学校を推奨された子どもの知能の診断結果

年度	合計	痴愚	魯鈍	境界線	学業不振	遅滞	延期
1914-15	157	13	52	42	38	2	10
1915-16	170	19	75	37	17	0	20
1916-17	144	33	53	54	1	0	3
1917-18	171	30	67	70	4	0	0
1918-19	117	9	69	36	1	0	2

出典) Wallin [1920a] 108

92)。ウォーリンは、親の反対に対しては、有能で訓練された訪問教員やソーシャルワーカーが、親を説得する役割を果たすことを求め、制度として彼らを雇用することが必要であると主張し (65th AR: Wallin [1920] 86)、法的手続きによる強制には慎重な態度をとった。

IV. 個々のニーズに対する教育の場の確保に向けた州法による特殊教育規定

1. 混合学年学級の不足と境界線児¹⁵⁾・学業不振児問題への対応不備

特殊学校対象児の整理について一定の成果を得たものの、セントルイス市では境界線児・学業不振児に対する教育的対応の不備という課題が、依然として残った。しかし、境界線児・学業不振児の処遇は同市に限定される問題ではな

かった。他都市においても、彼らの教育の場として想定された特殊学級が、学業・行動の逸脱児から精神薄弱児の分化を経て、精神薄弱者施設の過密化、精神薄弱脅威論、公立学校の機会均等理念を背景とし、精神薄弱学級へと変容していったことで (中村 [1991] 89-90)、境界線児・学業不振児は事実上、通常学級で放置されるか、精神薄弱学級へ不適切に措置されていた。こうした現状に対し、ウォーリンは、対象と機能が完全に明確な学級のセットを組織することで対処を試みる (岡ら [2010] 5)。

そもそも、心理教育クリニックへ権限を移した新しい検査手続きにおいては、重度の遅滞の発見を重視した手続きゆえ、境界線児や学業不振児を排除する可能性が内包されていた¹⁶⁾。加えて、心理教育クリニックにおけるスタッフ不

足は、境界線児・学業不振児に対しても、精神薄弱児と同等の注意深い検査が必要であると考え、彼にとって (65th AR: Wallin [1920] 75)、深刻な問題であった。心理教育クリニックは、毎年400人から500人の子どもを検査していたが、年に2000人程度検査する必要があるとウォーリンは主張した (65th AR: Wallin [1920] 107)。他都市の公立学校におけるクリニックのスタッフを参照しながら、少なくとも2人か3人の助手の採用を求めているが (65th AR: Wallin [1920] 108)、結局、彼の在任期間中に増員されることはなかった。

境界線児や学業不振児の通常学級での放置は、経済的・教育的に非効率¹⁷⁾であり、その対策は不可欠であった。彼らは適切な身体的保護や教育的訓練が与えられれば州や国家にとっての価値となるが、放置されれば犯罪や非行といった社会的脅威になると考えられていた (62nd-63rd 65th AR: Wallin [1917] 160-162; [1918] 170; [1920] 75; Wallin [1917b] 589)。彼らに対してはⅡの1でみたように、1900年代初めから、通常学級内に開設される混合学年学級¹⁸⁾での対応が望ましいと考えられていたが、その数は心理教育クリニック開設時にも不足しており、ウォーリンはその増設を継続的に求めている (61st-62nd 65th AR: Wallin [1916] 151; [1917] 173; [1920] 102-103)¹⁹⁾。

混合学年学級の増設に向けた主な障壁は、設置場所の確保の困難、同学級の利点について校長の認識不足であるとウォーリンは指摘した (Wallin [1920a] 110)。そこで彼は、市教育委員会の選択に任されていた混合学年学級を含む特殊学級の開設を、州教育行政による設置義務化へと変えるべく (Wallin [1917c] 58-59)、州法の制定に取り組むこととなる。

2. ウォーリンの民主主義理念と州法による特殊学級設置義務化

20世紀初頭の教育的指導者は、公立学校における平等と民主主義について模索し、革新主義教育における民主主義は、「機会の平等と多様性、人の能力が許される限り伸ばされる機会

を提供すること」に力点が置かれていた (タイヤック [2005] 127)。ウォーリンもまた、異なる段階の能力、特別な能力、障害といった多様なニーズを満たすための、標準とは異なる訓練の提供こそが民主主義であるとする思想のもと (65th AR: Wallin [1920] 85-86)、州法による子どもの差異化と教育の場の設置を実現させる。

ウォーリンは、1915年から欠陥児に関する法案を作成、提案しており、1916年1月にはミズーリ州児童規定委員会 (Children's Code Commission) における欠陥児委員会に参加した。その後、彼の法案は、州議会によって法の中に規定された (Wallin [1922a] 125)。

1919年と1921年のミズーリ州議会で可決された法のもと、学区は、盲、聾、精神薄弱、肢体不自由の子どもが、10人以上学区内に在籍している場合、彼らのための特殊学級を設立すること、言語欠陥の子どもが学区内に50人以上いる場合、必ずしも特殊学級でなくても良いが、言語矯正訓練を提供することが規定された。1つの学区内で規定の人数に満たない場合は、2つ以上の学区で特殊学級を開設することが許可された。市教育委員会は、上記の子どもの数を毎年州に報告することが規定された。各学区は、特別な訓練を受けた特殊学級教員1名につき、年750ドルの州援助を受けることができた。これらの規定は、精神薄弱ではないが学業に遅れのある子どもが20人以上いるときに開設される混合学年学級にも適用された (Wallin [1921b] 447-448)。

以上のように、民主主義理念の下、州法によって、多様な子どもの雑然とした状態から、障害種の基準により分類・整理された状態へと制度的には整った。しかし、精神薄弱児と学業不振児の区別、すなわち、特殊学級と混合学年学級の対象者の区別は、ミズーリ州に限らず困難な課題であったことは既述の通りであるが、同法ではいかにして行われたのであろうか。

ウォーリンによれば、両学級の対象者の区別は主に、標準化された知能検査から得られた知能指数 (intelligence quotient: 以下IQ) によって

行われた。混合学年学級の対象者は、IQ65から90の子どもが想定された。特殊学級においては、精神年齢3歳未満、IQ30未満と、精神年齢9歳以上、IQ70以上の子どもは入級対象外であった (Wallin [1921b] 449, 451)。

このように、ウォーリンは、IQを軸にすることで、精神薄弱児と学業不振児の区別を実現させようとしたが、彼が知能検査の結果に全面的信頼をおいていなかったことは前述のとおりである。そのため、数量的・形式的な対応を回避するよう、とりわけ特殊学級の入学前には、子どもの身体的状態、生育歴、教育歴、家族に関する調査など、子どもの身体的・社会的環境の影響についての調査が実施されなければならないと州法において規定された (Wallin [1922a] 128)。

さらにウォーリンは、各学級へ入学後も、両学級間の移動は弾力的であるべきと主張する (Wallin [1924] 762)。とりわけ診断が不確かな子どもについては、特殊学級よりも混合学年学級に措置し、1年か2年以内に進歩がみられないならば、特殊学級への移動が適切かどうかを再度検査されるべきであるとされた (Wallin [1924] 761-762)。こうすることで、全ての子どもがもつ奪われることのない権利の侵害や学校行政による独裁的決定の危険性を排除できると彼は考えていた (Wallin [1924] 761)。

特殊学級と混合学年学級のカリキュラムは、それぞれの学級の対象児の将来像を意識し、区別された内容が用意されていたが、両学級とも社会適応を重視する傾向がみられた。州法において、特殊学級では、回復 (restoration) や指導 (coaching) を意図していないため、その訓練内容は卒業後の可能な限りの幸福さ、有用さを与えるものと規定された。具体的には、全授業時間の35%が読み書き、35%が手工訓練、残りの時間が身体訓練や感覚運動訓練等であった。一方、混合学年学級の場合、通常学級への復帰、もしくは卒業後の就労を目ざした指導内容であった。読み書き指導は、特殊学級よりも多く、その方法は具体的で口述の説明を多く用いるこ

と規定された。また、年齢が高くなるにつれて、職業教育が与えられた (68th AR: Wiley [1923] 68-69)。

V. おわりに

ウォーリンは、セントルイス市の心理教育クリニックにおける7年の在任期間を通じ、民主主義理念のもと、個々の状態像を適切に把握する方法と、個々のニーズに適した教育の場の確立を目指した。知能検査の限定的活用、検査手続きにおける専門家主導、州法による特殊学級設置義務化を通じて、ウォーリンは多様な要素を整理し、個々のニーズに適する区別化された教育を提供する基盤を形成した。こうした過程において、革新主義期の心理学者に共通した効率と合理性の重視がみられる一方で、彼が一人一人の子どものニーズや教育を受ける権利を重視していたことが見て取れる。

一方で、州法による特殊学級規定は、即座の実効化には必ずしも結びつかず、州内の特別な援助が必要な多くの子どもへ適切な教育環境を整備することは依然として困難であった。その背景には、教員の理解不足、州法における曖昧な規定、有能な検査者不足などがあり (Wallin [1920b] 280-281)、とりわけ、有能な検査者の確保は予算的制約もあり困難であった (Smith [1914] 152)。また、ウォーリンの離職後、セントルイス市教育委員会は、検査部門を設立し、混合学年学級対象者のために、集団式検査を採用しており (Wiley [1927] 189-190)、教育行政の効率化が促進されたと想定できる。これら、州法の制定過程や制定後の展開過程の詳細な検討は今後の課題としたい。

註

- 1) 遅進児と学業不振児は、知的に正常であり、十分な励ましと時間、そして援助があれば、教科をゆっくりと学ぶ能力をもつ子どもを示しており、一方、精神薄弱児は、それとは異なり、生来的に能力がなく、遅進児でさえ可能な量と質の学業ができないため、正常児とは全く異なる

- 教育計画や環境を必要とする子どもを示している (48th AR: Soldan [1903] 144-149; 53rd AR: Soldan [1908] 332)。
- 2) 異なる状態像をもつ子どもの区別は当時の教育・心理関係者の間で大きな関心事であった。とりわけ、精神薄弱による遅滞と、精神薄弱以外の要因による遅滞の明確な区別は困難であった (Barnes [1908] 1120; Goddard [1911] 1041)。
 - 3) 1903年時点では、教室の過密化や経済的理由によって、両者の対策は不十分であった (48th AR: Soldan [1903] 144-149)。
 - 4) ミズーリ州就学義務法が1905年に制定された3年後のことであった。
 - 5) 特殊学校への入学に際しては、大きな配慮を要するとされ、校長と教員の推奨のもと、教育長の承認によって認められたが、医学専門家による検査も求められた (53rd AR: Soldan [1908] 338; 66th AR: Wallin [1921] 132)。
 - 6) 1920年時点で特殊学校は12校開設されていたが、通常学校内には1学級しかなく、それも一時的なものであった (66th AR: Wallin [1921] 135)。
 - 7) ウォーリンによれば、彼の着任以前の特殊学校には、言語欠陥、麻痺、神経症、視覚失語症、ディスレキシア、弱視、難聴、非行などが在籍しており、彼らの多くは知能の面で単なる学業不振であった。彼は、特殊学校在籍生徒のうち約3分の1から2分の1が特殊学校の厳密な対象者ではないと推定した (Wallin [1920a] 104-105)。
 - 8) ウォーリンは、公立学校制度内の心理クリニックを心理教育クリニックと呼称した。その理由は、そこで行われる診断は心理学的であると同時に教育的でもあるからであった (Wallin [1914] 138)。
 - 9) 公立学校制度内に開設する場合、予算不足とアマチュアの検査者という問題を内包していることを、ウォーリンは危惧していたが (Wallin [1915] 116)、この問題は、心理教育クリニック開設後、常に存在し続けることになる。
 - 10) 心理教育クリニックのスタッフは、ウォーリン1人であり、慢性的なスタッフ不足であった (65th AR: Wallin [1920] 107)。
 - 11) ウォーリンは、精神薄弱遺伝説に疑問を呈していたが (Wallin [1920a] 134)、1919年には精神病、痴愚、精神薄弱者、てんかん者の婚姻制限法案を州議会に提案している。しかし、同法案は両院によって否決されている (Wallin [1919c] 57)。一方で、彼は白痴 (idiot) と重度の痴愚を除く精神薄弱児の訓練と教育の可能性を排除すべきでないとしており (Wallin [1934] 404)、学校教育の範囲を当時としては最大限まで拡大していた (中村・岡 [2010] 129)。
 - 12) これらの情報は、各学校の教職員や校長に加えて、市の衛生検査官、学校看護婦、出席管理官などの協力によって集められた (66th AR: Wallin [1921] 136-137)。
 - 13) 利点として、検査が素早く実施できる点に加え、校長との面談機会が得やすいことを挙げたが、不十分な設備や不適切な環境による検査の困難、そして表面的な検査では明確な診断を下せない子どもの存在をウォーリンは指摘した (63rd AR: Wallin [1918] 162)。
 - 14) ウォーリンは、精神薄弱児が1人もいない学校が実際に存在するかどうか疑問を呈しながらも、その可能性は否定できないとした (63rd AR: Wallin [1918] 169)。
 - 15) 境界線とは、学業不振と精神薄弱の間に位置し、診断が困難な状態を示している。
 - 16) その他、この手続きの欠点として、親の無関心や検査への反発による情報の不足があった。この問題に対しウォーリンは、親への適切な情報提供が不可欠であると述べるとともに、訪問教員やソーシャルワーカーの採用による情報の補完も重要であると指摘した (65th AR: Wallin [1920] 85-86)。
 - 17) 通常学級において、境界線児・学業不振児と正常児・英才児が一緒に教育されることによって生じる留年という経済的損失、子どものもつ特定のニーズに合う訓練を提供できない教育的非効率を、ウォーリンは危惧した (65th AR: Wallin [1920] 102-103; Wallin [1917c] 59)。
 - 18) 混合学年学級は、診断が困難で不確かな状態である子どものための判別所としての役割と (61st AR: Wallin [1916] 139)、彼らが必要とする特別な援助を与える役割が期待された (65th AR: Wallin [1920] 102-103)。
 - 19) ウォーリンは、同学級が数の面で十分に確立されれば、セントルイス市の公立学校における精神欠陥 (mental deficiency) や教育学的不遅滞 (pedagogical retardation) の問題への対処は容易になるだろうと述べた (62nd AR: Wallin [1917] 162)。

実際、混合学年学級の成果は彼を満足させるものであり、混合学年学級で指導を受けた総生徒数の42.3%にあたる1317人は通常学級へ復帰することができた (63rd AR: Wallin [1918] 184)。

文献

- Annual Report of the Board of Education of the City of St. Louis, Missouri (AR). 48th (1903), 53rd (1908), 57th (1912), 59th (1914)-63rd (1918), 65th (1920), 66th (1921), 68th (1923).
- Anonymous (1945) J. E. W. Wallin; Pioneer. *Journal of Exceptional Children*, 11 (8), 228.
- Barnes, E. (1908) The Public School and the Special Child. *Proceedings of the National Education Association*, 46, 1118-1123.
- Blewett, B. (1909) Provision for Exceptional Children in the Public School of St. Louis. *Proceedings of the National Education Association*, 47, 355-360.
- Brown, J. (1992) *The Definition of a Profession -the Authority of Metaphor in the History of Intelligence Testing, 1890-1930*. Princeton University Press, Princeton, New Jersey.
- Chapman, H. B. (1927) Psychological Services of Educational Research Bureaus. *Educational Research Bulletin*, 6(5), 92-97, 106-107.
- Chapman, P. D. (1988) *School as Sorters Lewis M. Terman, Applied Psychology, and the Intelligence Testing Movement, 1890-1930*. New York University Press, New York. 菅田洋一郎・玉村公二彦監訳 (1995) 知能検査の開発と選別システムの功罪—応用心理学と学校教育—. 晃洋書房.
- Danforth, S. (2009) *The Incomplete Child*. Peter Lang, New York.
- Doll, E. E. (1967) Trends and Problems in the Education of the Mentally Retarded: 1800-1940. *American Journal of Mental Deficiency*, 72(2), 175-183.
- Goddard, H. H. (1911) Causes of Backwardness and Mental Deficiency in Children and How to Prevent Them. *Proceedings of the National Education Association*, 49, 1039-1046.
- Hermann, B. (2010) 100 Years of Epilepsia: Landmark Papers and Their Influence in Neuropsychology and Neuropsychiatry. *Epilepsia*, 51(7), 1107-1119.
- Hoffman, E. (1975) The American Public School and the Deviant Child: The Origins of Their Involvement. *Journal of Special Education*, 9(4), 415-423.
- Luckey, B. M. (1967) The Contributions of Psychology to the Problems of Mental Retardation with Some Implications for the Future. *American Journal of Mental Deficiency*, 72(2), 170-175.
- Minton, H. L. (1987) Lewis M. Terman and Mental Testing: In Search of the Democratic Ideal. M. M. Sokal (Ed.), *Psychological Testing and American Society 1890-1930*. Rutgers University Press, New Brunswick and London, 95-112.
- 宮本健市郎 (2005) アメリカ進歩主義教授理論の形成過程. 東信堂.
- 森田尚人 (1994) 発達観の歴史的構成 遺伝-環境論争の政治的機能. 森田尚人・藤田英典・黒崎勲・片桐芳雄・佐藤学 (編), 教育学年報3 教育のなかの政治. 世織書房, 101-138.
- 中村満紀男 (1991) 20世紀初頭アメリカ合衆国における公立学校センター論と特殊学級の確立. 社会事業史研究, 19, 85-101.
- 中村満紀男 (1992) 世紀転換期アメリカ公立学校制度における精神薄弱特殊学級(学校)の成立とその意義について (1). 秋田大学教育学部研究紀要 教育科学部門, 43, 77-99.
- 中村満紀男 (2008) 20世紀初頭米国クリーブランド公立学校における問題行動から学業不振・精神薄弱への分化過程. 障害科学研究, 32, 21-34.
- 中村満紀男・岡典子 (2009) 障害児教育における目的・本質論の歴史的変遷とその理論的・実践的意義—序説. 障害科学研究, 33, 113-126.
- 中村満紀男・岡典子 (2010) 公立学校制度における特殊学級の確立と通常教育との二元的世界の形成 (1920s～1950s) と専門性の希薄化・インクルージョン運動前夜 (1960s～1980s). 中村満紀男 (研究代表者) 特殊教育とインクルーシブ教育の創造的融合による特別支援教育革新のための総合的研究, 平成18年度-21年度科学研究費補助金 (基盤研究 (A)) 研究成果報告書, 115-140.
- 野村達朗 (1995) ヨーロッパ系移民の流入と世紀転換期の合衆国人口の構成. 佐々木隆・明石紀雄・大井浩二・岡本勝 (編), 100年前のアメリカ—世紀転換期のアメリカ社会と文化. 修学社, 15-33.
- 岡典子・中村満紀男・吉井涼 (2010) 公立学校における特殊学級の開設と教育目的・本質論革新の可能性—19世紀末～1910年代アメリカ都市公立

- 学校一. 障害科学研究, 34, 1-16.
- Popplestone, J. A. & McPherson, M. W. (1994) *An Illustrated History of American Psychology*. Brown & Benchmark Publishers, Madison.
- Ravitch, D. (2000) *Left Back: A Century Battles over School Reform*. Simon & Schuster, New York. 末藤美津子・宮本健市郎・佐藤隆之 訳 (2008) 学校改革抗争の100年 20世紀アメリカ教育史. 東信堂.
- Routh, D. K. (2000) Clinical Psychology Training A History of Ideas and Practices Prior to 1946. *American Psychologist*, 55 (2), 236-241.
- Scheerenberger, R. C. (1983) *A History of Mental Retardation*. Paul H. Brookes Publishing Co, Baltimore and London.
- Smith, T. L. (1914) The Development of Psychological Clinics in the United States. *The Pedagogical Seminary*, 21, 143-153.
- Trent, J. W. Jr. (1995) *Inventing the Feeble Mind: A History of Mental Retardation in the United States*. University of California Press, Berkeley. 清水貞夫・茂木俊彦・中村満紀男監訳 (1997) 「精神薄弱」の誕生と変貌：アメリカにおける精神遅滞の歴史 (下). 学苑社.
- Troen, S. K. (1975) *The Public and the Schools Shaping the St. Louis System, 1838-1920*. University of Missouri Press, Columbia.
- Tyack, D. (2003) *Seeking Common Ground Public Schools in a Diverse Society*. Harvard University Press, Cambridge and London. 黒崎勲・清田夏代訳 (2005) 共通の土台を求めて 多元化社会の公教育. 同時代社.
- Wallin, J. E. W. (1913) Current Misconceptions in Regard to the Functions of Binet Testing and of Amateur Psychological Testers. *Transactions of the Fourth International Congress on School Hygiene*, 5, 678-689.
- Wallin, J. E. W. (1914) *The Mental Health of the School Child*. Yale University Press, New Haven.
- Wallin, J. E. W. (1915) The Problem of the Feeble-Minded in Its Educational and Social Bearings. *School and Society*, 2, 115-122.
- Wallin, J. E. W. (1917a) Chapter II Who Is Feeble-Minded? J. E. W. Wallin (Ed.), *Problems of Subnormality*. World Book Company, New York, 110-277.
- Wallin, J. E. W. (1917b) Feeble-Mindedness and Delinquency. *Mental Hygiene*, 1, 585-590.
- Wallin, J. E. W. (1917c) The Feeble-minded in the State of Missouri. *The Psychological Clinic*, 11 (2), 55-68.
- Wallin, J. E. W. (1918) Preliminary Impressions of the Standard Revision of the Binet-Simon Scale. *The Psychological Clinic*, 7 (1), 1-15.
- Wallin, J. E. W. (1919a) The Value of the Intelligence Quotient for Individual Diagnosis. *Journal of Delinquency*, 4, 109-124.
- Wallin, J. E. W. (1919b) The Field of the Clinical Psychologist and the Kind of Training Needed by the Psychological Examiner. *School and Society*, 9, 463-470.
- Wallin, J. E. W. (1919c) Measures Enacted by the Missouri Legislature for the Care of Defective Children. *School and Society*, 10, 55-57.
- Wallin, J. E. W. (1920a) The Problems Confronting a Psycho-Educational Clinic in a Large Municipality. *Mental Hygiene*, 4, 103-136.
- Wallin, J. E. W. (1920b) The Missouri Compulsory Special Class Education Law. *The School and Community*, 278-283.
- Wallin, J. E. W. (1921a) The Results of Retests by Means of the Binet Scale. *The Journal of Educational Psychology*, 12, 392-400.
- Wallin, J. E. W. (1921b) Suggested Rules for Special Classes. *Educational Administration and Supervision*, 7, 447-458.
- Wallin, J. E. W. (1922a) A Study of the Industrial Record of Children Assigned to Public School Classes for Mental Defectives, and Legislation in the Interest of Defectives. *The Journal of Abnormal Psychology and Social Psychology*, 17 (2), 120-131.
- Wallin, J. E. W. (1922b) An Investigation of the Sex, Relationship, Marriage, Delinquency and Truancy of Children Assigned to Special Public School Classes. *The Journal of Abnormal Psychology and Social Psychology*, 17 (1), 19-34.
- Wallin, J. E. W. (1922c) The Theory of Differential Education as Applied to Handicapped Pupils in the Elementary Grades. *The Journal of Educational Research*, 6 (3), 209-224.
- Wallin, J. E. W. (1923) The Consistency Shown by

J. E. W. ウォーリンによる心理教育クリニックの創設と個別的ニーズへの対応

Intelligence Ratings Based on Standardized Tests and Teachers' Estimates. *The Journal of Educational Psychology*, 14 (4), 231-246.

Wallin, J. E. W. (1924) Classification for Instruction of Mentally Deficient and Retarded Children. *Mental Hygiene*, 8, 753-768.

Wallin, J. E. W. (1934) The Philosophy of Education for the Mentally Handicapped Child. *Mental Hygiene*, 18, 393-408.

Wallin, J. E. W. (1955) *The Odyssey of a Psychologist Pioneering Experiences in Special Education, Clinical Psychology, and Mental Hygiene: with a Comprehensive Bibliography of the Author's Publications*. Edwards

Brothers, Inc., Wilmington.

Wiley, F. L. (1927) Origin of the Division of Tests and Measurements in the St. Louis Public Schools. *Educational Research Bulletin*, 6 (9), 188-192.

Winzer, M. A. (1993) *The History of Special Education*. Gallaudet University Press, Washington, D. C.

Zenderland, L. (1998) *Measuring Minds Henry Herbert Goddard and the Origins of American Intelligence Testing*. Cambridge University Press, Cambridge.

参照URL

<http://physics.bu.edu/~redner/projects/population/cities/>
(2012/8/26 アクセス)

Historical Study on the Treatment for the Pupil's Individual Needs by J. E. W. Wallin in the St. Louis Public School Psycho-Educational Clinic

Ryo YOSHII

The practice and thought of J. E. W. Wallin who run a psycho-educational clinic for feeble-minded and backward children in the city of St. Louis public schools in the early twentieth century were analyzed. At that time, problems that the special schools faced were classification between feeble-minded and backward children. Wallin suggested and carried out the following provisions to solve these problems. He carried out individual examination with different tests at the clinic. While he revised a process of examination to allow the clinic to decide if a child needs examination. As a result there was decrease of special school enrollment. Although he evaluated proper classification was developed, the problems of backward children remained due to both the shortage of staff at the clinic and the lack of ungraded classes in public schools. He considered that they had the possibility of being returned to regular classes by proper educational care. The establishment of Missouri state law, in which Wallin took the lead, required the board of education to establish several different types of special classes designed by individual needs. In this background, there was his belief that providing children with differentiated training based on individual needs was democracy.

Key words: feeble-minded, backward, psychology, intelligence testing, special class